

Coffee が紡ぐ未来と Cigarette をふかす瞬間 ——Katherine Anne Porter の“Pale Horse, Pale Rider”にみる時間の問題——

西岡 かれん

1. “Pale Horse, Pale Rider”における自伝的要素の検証とその世界観について

キャサリン・アン・ポーター（Katherine Anne Porter, 1890-1980）の代表作の一つに数えられる中編小説 “Pale Horse, Pale Rider”（1939）は、これまで彼女の自伝的要素の最も強い小説として読まれてきた。スペイン風邪とも呼ばれたインフルエンザが猛威をふるう第一次世界大戦中の米国コロラド州を舞台に、新聞記者として働く Miranda と、つかの間の休暇を得て軍隊から戻ってきた中尉 Adam の間に生じる短いロマンスのプロットに加えて、インフルエンザに感染した Miranda の生死をさまよう体験が描かれるこの小説は、たしかに、ポーターの伝記的事実と重なる部分が多い。実際に新聞記者として働いていたポーターは戦時中、インフルエンザにかかって臨死体験をし、そのことが後の彼女の作風にも大きな影響を与えた¹⁾。病床にある Miranda の詳細な心理描写の多くがポーター自身の当時の経験に基づいて描かれていると考えることは妥当であろう。一方、Adam と Miranda の恋愛エピソードについても、ポーター自身の証言を得て長年彼女の経験を下敷きに書かれているという見方がされてきた。しかし Laurel Bollinger は、この見解について、以下のような解説を加えて異論を唱えている。

While later Porter insisted that the real “Adam” was named Alexander Barclay and was the only man she truly loved, Givner suggests that Porter’s ongoing discussions “should properly be seen as the love of a writer for a favorite character” rather than a record of a real relationship (128-29), particularly given that “Alexander Barclay” was the name of the fifteenth century English translator of Sebastian Brandt’s 1494 satire *Ship of Fools*——a text and writer that Porter studied extensively while drafting “Pale Horse Pale Rider” (Brooker 221). (Bollinger 369)

また Darlene Harbour Unrue は、ポーターは、Adam という名前の着想を、自身がインフルエンザで入院していた Adams Memorial Hospital から得たのではないかという指摘（62）をしている。従って Adam という人物は、ポーターの想像上のキャラクターである可能性が高い。こういった指摘から分かるのは、“Pale Horse, Pale Rider”は現実の人物や時代背景を下敷きにした伝記的要素の強い小説としての側面を持ちつつも、そういった歴史的・伝記的事実を超えて、舞台装置や人物造形がより概念化

された仕掛けを持ったものとして立ち現れてくるような、モダニスト作家ポーターの技巧のつまった小説であるということである。

Walter Sullivan は、1970 年に寄稿したレビューのなかで、ポーター批評が、すべてニュー・クリティシズムの手法をとっていることを例に出し、Eudora Welty のポーター評を引いて“The narratives are told to us, and they transpire not in Texas or Germany or Mexico, but ‘on a stage of her own.’” (113) と述べている。ポーターのほかの作品の例にもれず、“Pale Horse, Pale Rider”には、聖書、黙示録、シェイクスピアの *Tempest* などを下敷きとした様々な暗喩的仕掛け²⁾がなされており、独特の世界観と修辭的な仕掛けで、読者に様々な解釈の可能性を投げかける。その作品世界は、Welty が指摘したように、決してポーター自身の経験のみに還元できるものではない。

本論では、この小説の技巧的側面に着目し、作中で暗示される旧約聖書を下敷きにした世界観を手掛かりにして、Adam と Miranda という主要な登場人物たちをめぐるやや図式的なまでに整えられた二項対立的構造を分析し、そのなかで繰り返し登場する coffee と cigarette というモチーフが持つ意味を、時間というテーマをキーワードにして明らかにしていきたい。

2. 楽園世界の完璧な Adam と、現実世界の傷だらけの Miranda

小説のヒロイン、Miranda の恋人 Adam は、その名が示す通り、旧約聖書の Adam になぞらえることができる。Miranda と出会ってたった 10 日間しか経っていないにも拘らず、インフルエンザに罹患した彼女の献身的な恋人となる Adam は、“there was no resentment or revolt in him” (295) と書かれるように穏やかな性格であるだけでなく、Jane Krause DeMouy が Adonis 的であると呼ぶ (163) 人間離れた肉体美を持ち合わせており、内面も外面も、不自然なほどに完璧 (flawless, complete) な人物として描かれる。彼は、“never had a pain in his life that he could remember”であり、また、“fine healthy apple” (280)という、旧約聖書のコンテクストを示唆するような単語で形容される。“Pure ... all the way through” (295) な Adam は、DeMouy が指摘するように、“uncorrupted Eden” (161)に住む、“a prelapsarian Adam” (163)なのである。以下の引用で、Unrue は、Adam と旧約聖書の関連を指摘すると同時に、Miranda が Adam と好対照をなす人物として描かれていることにも言及している。

Adam is in many ways Miranda's opposite, his masculinity opposed to her femininity, his innocence opposed to her cynicism. The Biblical significance of his name lies in his experience within the story. (Unrue 112)

Unrue のこの指摘について、より具体的な点を指摘し、二人の主要登場人物のキャラ

クター造形について分析を加えたい。戦争と疫病の影響力が渦巻く鬱々とした社会の影響をほとんど受けず、中尉としての誇りや自信に溢れる Adam とは対照的に、独身のしがたい新聞記者でしかない Miranda は、日々、自身の欠陥、弱さや間違いに向き合わざるを得ない。彼女に関する描写は、Adam のそれと違い、人間味に溢れている。被害にあった女性のために思って、あるスキャンダルを記事にしないという決断をした Miranda は、他誌にそのスクープを奪われたことへの責任を問われ、“routine female job” (275) しか任されない記者に降格される。その結果、“slitting envelops and pretending to read the letters” (284) などをして無為な時間を過ごしたり、自分のキャリアが順調でないことを演劇批評家のせいになしよとする俳優の理不尽な言い分を聞かされたりしながら、情熱を感じられないまま演劇評論を書く日々を送っている。金欠である上に、戦争のイデオロギーに反対している Miranda は、戦争協力のために自由公債を買うことを拒否するが、そのことにより社会からの彼女への風当たりは強くなる。様々な厄介ごとを抱えて悩みながら生きる彼女は、Adam とは反対に、“had too many pains to mention” (280) なのである。実際に、“fine and supple” な軍服と、“stout polished well-made boots” な靴で身を固め、“firmly” な足取りを崩さない Adam に対し、Miranda の靴は “thin-soled” (279) で、彼女の心もとない歩みを象徴しているかのようである。

戦争の影響は彼女の食生活にまで浸透しており、coffee を飲むときでさえ、クリームや砂糖を使って贅沢をすることは許されない (281)。しかし、不思議なことに戦争がもたらす禁欲的な風潮は、Adam には及んでいない。Adam は、Miranda と共に頼んだクリームと砂糖抜き coffee を、“Swill” と手荒く “push back” し、“I had buckwheat cakes, with sausage and maple syrup, and two bananas, and two cups of coffee, at eight o'clock” (282) と自らの豊かな食生活についての自慢をする。そもそも、軍隊に所属している Adam よりも、戦場に直接出向くことのない女性である Miranda の方がはるかに強く戦争の影響を受けていることが興味深い。Miranda は抜け殻のようになった負傷兵の見舞いに行くたびに、戦争の現実を突きつけられる。これから戦地に赴くであろう Adam と、彼女が見舞ってきた負傷兵を重ね合わせ、Miranda はこのような憂慮を持つ。

He [Adam] looked so clear and fresh, and he had never had a pain in his life. She had seen them [soldiers] when they had been there [war front] and back and they never looked like this again. (282-83)

しかしこの Miranda の心配は現実のものとはならない。Miranda は “what war does to the mind and the heart” が “what it can do to the body” (294) よりも兵士個人に対し

てひどい影響を与えることを知っている。Adam は最終的にインフルエンザにかかり、肉体的には死を迎えるが、本間喜美子が「“innocent”なまま、やがて楽園へ帰りに行く存在」(4)と書いているように、彼の心は最後まで戦争等による現実世界におけるダメージを受けることはなかった。

本間がここで言及する Adam の “innocence”について注目したい。Unrue も、先の引用で、Adam の “innocence”が Miranda の “cynicism”と対照をなすと説明している。実際 Miranda は、疫病、戦争、女性差別といったものに象徴される社会が抱える負の要素を、個人として引き受け、それが引き起こす痛み常に苛まれているため、Adam との間に育まれる楽園的な愛の可能性に強烈に惹かれつつも、すべてに対して懐疑的な態度をとってしまう皮肉屋となっている。これが、未だ楽園を追われていない Adam の “innocence”と好対照をなしている。DeMouy は、Adam の “innocence”について以下のように詳しく論じている。

He has “never had a pain in his life” (p.280) and is, Miranda thinks later, “pure ... all the way through, flawless ...” (p.295). Miranda thinks that he looks like “a fine healthy apple” (p.280), which suggests at once his well-being and his innocence, since the apple is uneaten, and, inversely, the temptation he is to Miranda, a jaded Eve who already knows the fear of love. (162)

Adam に心惹かれながらも、二人の関係が将来性を持つものではないことを察知している Miranda は、“I don’t want to love” (292) と述べるように、彼を手放しで愛することはできない。それは、Miranda との出会いを “what gorgeous luck” (279) と単純に言祝ぐ Adam の楽天的な愛情表現と対照的である。

このように、ポーターは、Miranda の生きる、戦争、疫病、差別、仕事に忙殺される日々、見通しの立たない将来など、ネガティブな要素を抱えた現実社会と、痛みを知らない Adam が生きる楽園の世界を明確に描き分けている。

3. 永遠が支配する眠りの国「楽園」と、常に時間に迫られる「現実世界」

本論第2章で論じたように、Adam と Miranda は、好対照をなす人物として描かれる。無傷で欠点のない墮落前の楽園の Adam と、現実社会から受けるダメージで傷だらけの Miranda は、文字通り別々の世界に生きている。Adam が生きる楽園と、Miranda が生きる現実が異なる世界であることは、二人に流れる時間の性質の違いからも明らかである。

Miranda は、誰もが、何かしらに迫られ、時間にゆとりを持つことができない慌ただしい現実社会にいる。そこでは、“... people hurried away, their faces already changed,

fixed, in their straining towards their next stopping place, already absorbed in planning their next act or encounter.” (284) と書かれるように、別れを告げたあとに振り向いて挨拶をしてくれる人はいない。そんな現実のなかでは、たった 5 分間だけ、Adam のことを考えたいという Miranda の望みさえ、叶えられることはない。なぜなら、“there was no time”だからである。この“there was no time”という表現は、作中何度も繰り返され、Miranda の、Adam と彼女に残された時間の少なさを嘆く気持ちや焦りを克明に示している。仕事に追われる Miranda は、Adam との約束の時間にいつも遅れてしまう。二人の間で、Miranda の遅刻が常習化していることは、“‘I imagine I’m late,’ said Miranda, ‘as usual. What time is it?’” (279)と、“‘Let’s get going; you [Miranda]’re late as usual’” (288)という別々の場面での二人の会話から分かる。そしてその遅れた時間を少しでも埋め合わせようとするかのように、Miranda は、“almost run down to meet him” (292)するのである。

一方、Adam は、全く焦る素振りを見せない。彼は、Miranda と別れたあとも、急いで次の目的地に向かうことはせず、“waiting as if he expected her to turn” (284) と書かれるように、しばらくその場にとどまっている。彼はいつも Miranda の仕事が終わるのを待っており、彼の方が待ち合わせに遅れることは決してない。Adam が Miranda にキスをするときの、“as if he had been kissing her for years” (305)という描写は、彼が直線的に過ぎ去っていく時間ではなく、repetitive で円環的な eternity を生きていることを示唆する。Adam は、Miranda の夢のなかで “fell straight back before her eyes, and rose again unwounded and alive” (305) と描写されるように、楽園の不死身の居住者であるのだ。

Adam と Miranda は、互いに、相手を自らの世界に引き寄せようとする。Adam の楽園は、眠りや死と関連付けられる。楽園で夢を見ている Adam との意識のすれ違いを感じる Miranda は、“She wanted to say, ‘Adam, come out of your dream and listen to me. I have pains in my chest and my head and my heart and they are real. I am in pain all over,...’” (296)という悲痛な訴えかけをし、Adam を、眠りや死を暗示する楽園世界から、痛みを伴ってもそれが“real”なものである現実世界に連れてこようとする。

他方で、Adam も、Miranda を自らの居住する楽園、すなわち眠り、あるいは死の世界に誘い込む試みを行う。インフルエンザに罹患した彼女の看病を続ける Adam は、“I love you, go to sleep” (304) といって Miranda を寝かしつける。眠りはここで、彼女を痛みのない死の世界に誘ってゆく。瀕死状態の Miranda は、“absence of pain” (308) な眠りのなかで、oblivion を経験し、eternity を身近に感じる。子供時代に戻った夢のなかで、彼女は、“Look, don’t be afraid, it is nothing, it is only eternity” (310) と囁く声を聞く。彼女は、時間が永遠にある、痛みのない Adam の楽園に一歩足を踏み入れるのである。しかし、彼女の本能が、彼女を楽園の眠りから呼び覚まし、“Oh, I must go back!” (312) と囁いて、再び痛みを伴う現実へと彼女を引き戻す。

こうして、二人は、お互い、自らの世界に相手を引き寄せることには失敗した。しかし、一方は永遠の時間を持て余す世界におり、もう一方は圧倒的に時間が足りない世界にいるという分断された状況のなかで、Miranda は、Adam の世界との交錯点を見出すことに成功する。

4. Adam と Miranda の世界が交錯する「今」の瞬間

本間は、“Pale Horse, Pale Rider”を、「圧倒的に死が支配する世界」(4) と呼び、以下のように論じた。

Porter はこの死の世界に Adam を導入することによって、この世界を巧みに楽園追放後の世界とし、Adam と Eve の楽園追放の神話を主題に集約しようとしている。しかしこの物語では、楽園を追放されたのは Eve である Miranda のみであることが、Adam と Miranda の疎外を天国と地獄の隔たりにしている。(4)

本間はまた、ポーターが、Adam と Miranda 二人の「地獄をさえも共に分かち合えない疎外を鮮やかな手法で描出する」(4) と書いており、本作品の解釈において Adam と Miranda の世界が完全に分断されており、そこには交錯の余地がないかのような論じ方をしている。しかし本間は、Adam と Miranda が一緒にいるときには、円環的に流れる永遠の時間でもなく、直線的に過ぎ去っていく時間でもない、第三の時間の流れ方をしていることを見落としている。

これまで見てきたように、Miranda の生きる現実の世界は、そこに生きる人々に対し、常に先のことを考えるように急かすため、彼らは時間がないことにいつも焦りを感じるはめになる。病床で死を意識した彼女は自分の人生を振り返り、Adam に向かって次のように言う。

“There’s nothing to tell, after all, if it [Miranda’s life] ends now, for all this time I was getting ready for something that was going to happen later, when the time came. So now it’s nothing much.” (302)

ここからも分かるように、彼女はこれまで、先のことを考えすぎたために、「今」という瞬間を生きてこなかった。先のことを考える癖がついている Miranda は、Adam との関係に将来がないことを予知する。例えば彼女は、“For just one split second she got a glimpse of Adam when he would have been older, the face of a man he would not live to be.” (295) と考える。結局現実のものとなってしまうこの予知は、彼女を不安にさ

せ、彼女は“there was nothing at all ahead for Adam and for her”であることを“overwhelming and awful knowledge” (291) と呼んでいる。

しかし、Miranda は、異なる時間の流れを持つ世界を生きる二人にとって、唯一、すれ違うことなく共に存在できる方法は、「今」の瞬間を味わいつくすことであると気づく。Adam と small talk を楽しむ Miranda は以下のような思いに浸る。

... the radiance which played and darted about the simple and lovely miracle of being two persons named Adam and Miranda, twenty-four years old each, alive and on the earth at the same moment. (280)

先のことを考えがちな Miranda だが、このとき、彼女は Adam と語らいながら歩いているまさしくその“moment”を十全に享受しようとする。また、“In the street, they lit their cigarette and walked slowly as always.” (294)とあるように、いつも焦って“run down”する Miranda の方は歩を緩めることを学び、円環的な時間を生きる Adam はゆっくりであっても前に進むという直線的な動きを学ぶことによって、二人は、異なる世界の間地点を模索する。“This is what we have, Adam and I, this is all we’re going to get, this is the way it is with us.” (296)という Miranda のセリフには、「今」を大切にすしかないという彼女の覚悟が見て取れる。Miranda は、インフルエンザに罹患しつつも、Adam にこのような問いかけをする。

“Don’t you love weather and the colors at different times of the day, and all the sounds and noises like children screaming in the next lot, and automobile horns and little bands playing in the street and the smell of food cooking?” (302)

ここでまさしく、彼女は、今という瞬間を生きる喜びについて悟っている。二人にとっての交錯地点は、「今」この瞬間であったのだ。

5. coffee と cigarette の役割

本章では作中何度も登場する coffee と cigarette という嗜好品が、これまで論じてきた、作品のなかにおける異なる時間の流れを象徴する機能を持っているという著者の仮説について考察する。

これについて論じる前にまず、この小説の三つのセクションについて確認したい。Unrue は、この小説を三つのセクションに分け、一つ目、二つ目、三つ目のセクションをそれぞれ、“Miranda as social being”、“Miranda’s night of delirium in the room of the boarding house, with Miranda and Adam in the forestage”、“Miranda alone in the hospital”

(106)と分類した。また、Youngblood もこれと同様、三つのセクションを、“Miranda in the world”、“Miranda-and-Adam”、そして “Miranda alone”と分類する。このうち、はじめの二つのセクションで、coffee と cigarette が頻出する。Miranda は二つのセクションを通して大量の coffee を飲み続けるが、二人で coffee を一緒に飲むシーンは実は一場面しかない。それに対し、二人は大抵 cigarette を一緒に吸い、その頻度は第二セクションの、Miranda と Adam が二人きりになるシーンで加速度的に増える。

Miranda は、unnatural hours まで起きて仕事をする自分のライフスタイルについて “eating casually at dirty little restaurants, drinking bad coffee all night, and smoking too much” (280)であると述べている。とりわけ、夜遅くまで起きて仕事をするために、眠気覚ましとなる coffee は、Miranda にとっては必需品である。また、インフルエンザにかかった Miranda は病院で、アイスクリームと hot coffee を摂取するように指示される。そのため、Adam は彼女に大量の coffee を飲ませる。結果的に Miranda の病は治癒するので、coffee は治療薬としての役割も果たしたことが分かる。

この二つの事例から分かるように、coffee は、「今」の瞬間を楽しむための嗜好品としてではなく、それを飲んだことで眠気をおさめて仕事時間を確保したり、病気を治して、未来の時間を紡ぐのである。この意味で、coffee は Miranda の生きる現実社会で活用される飲み物であると言える。また当然 Adam は Miranda に比べて coffee を飲むシーンが圧倒的に少ないが、そのうちの 하나가 Adam が Miranda の仕事終わりをレストランで待つ場面である。ここで Adam は、Miranda との夕食という近い未来の時間に備えるために coffee を飲む。coffee は、このように未来志向の飲み物である。従って Miranda と共に coffee を飲もうとした Adam が、砂糖とクリームが入っていないことを理由にそれを“push back”したことは、二人に共通の未来がないことを暗示する。

Adam との将来がないことを知って嘆く彼女は、同じレストランに居合わせたカップルを見て、羨ましさを感じる。その場面を、ポーターはこのように描写している。

They had cups of coffee before them, and after a long while—Miranda and Adam had danced and sat down twice—when the coffee was quite cold, they drank it suddenly, then embraced as before, without a word and scarcely a glance at each other. ... no matter what kind of hell, it was theirs, they were together. (296)

このカップルは、coffee を共に飲む行為によって、共に生きる時間を未来につないだ。それを見て Miranda は、羨ましいと感じているのである。

一緒にコーヒーを飲めない Miranda と Adam が、その代わりに二人で楽しむのは

cigarette である。coffee と cigarette はほぼ同じ回数登場するのだが、coffee は Miranda だけが飲むシーンがほとんどなのに対し、cigarette は二人で吸うシーンがほとんどである。

cigarette には、coffee を飲むときのような、時間を未来につないでゆく機能はない。長期的にみると身体に必ず悪影響を及ぼすことが明白である cigarette は、吸っている瞬間を刹那的に楽しむためのものであり、まさに「今」を享受するための道具なのだ。終始健康的な Adam が作中で身につける唯一の不健康な習慣が喫煙である。Adam は“what smoking did to the lungs”を十分に理解した上で、“does it matter so much if you’re going to war, anyway?”と、将来を顧みない発言をし、それに対して Miranda も、“and it matters less if you’re staying at home knitting socks. Give me a cigarette, will you?”(280)と応じている。インフルエンザにかかったのちも、Miranda は、cigarette を吸い続け、その際に必ず“light one for yourself” (300) と言って Adam に共に吸うことを強要する。

cigarette が二人の世界の交錯点である「今」の瞬間を象徴するものであるとするならば、Adam が“gone round the block to get cigarettes”をしている間に救急車がきて Miranda が病院に連れて行かれ、それ以降二人が顔をあわせることなく Adam が死んでしまうというのもまた、暗示的である。cigarette を切らせてしまった瞬間、二人は「今」という交錯点を失うことになるからである。

以上のように、coffee と cigarette はそれぞれ、Miranda 的な未来志向の時間の流れと、Miranda と Adam 二人が共有する「今」を象徴する小道具として機能する。このように、ポーターの“Pale Horse, Pale Rider”には様々な文学的仕掛けが施されている。こういった小道具が、時間というものをテーマに樂園と現実世界の相克を描いた彼女の壮大な物語世界を細かく彩る役割を果たしていると言えるだろう。

6. まとめにかえて

本稿では、様々な隠されたテーマや仕掛けを持ちうる“Pale Horse, Pale Rider”における、現実世界と樂園世界及びそれぞれの世界に属する Miranda と Adam の二項対立的構造を、キャラクター造形やそれぞれの世界の時間の流れ等を用いて分析するとともに、そのなかで coffee と cigarette が持ちうる象徴的意味合いについて考察を加えた。ポーターは、Adam の住む樂園の世界との対比によって、Miranda が疲弊しながら生きている鬱々とした現実社会の姿を克明に浮かび上がらせている。そこには、誰もが労働に追われ、あてのない未来に向けて働かされる資本主義社会に対するポーターの批判の眼差しが感じられる。しかしポーターは必ずしも、永遠の時間を持て余す樂園的生活を推奨しているわけではない。またポーターは、「今」の瞬間にフォーカスするという Adam と Miranda の解決策に対する彼女自身の見解も、cigarette の描写を多用して、「煙に巻いて」いる。だがいずれにせよ、時間の問題は、

物語のクロノジカルな時間軸に挑戦したモダニスト作家の一人であったポーターにとって重要なテーマであったことは間違いなく、ポーターの時間概念に対する姿勢を明らかにする試みは今後も続けられるべきである。

註

¹⁾ ポーターの作品は、George Cheatham が指摘するように、死をテーマにしたものが圧倒的に多い (163)。彼女の有名な短編は、“The Grave”、“Old Mortality”、“Pale Horse, Pale Rider”であり、どれも、タイトルから死を連想させるものである。

²⁾ “Pale Horse Pale Rider”には、少なくとも黙示録、シェイクスピアの *Tempest*、そして聖書等への明らかな言及がある。Bollinger は、Miranda の4匹の馬が出てくる夢や、疫病のモチーフなどを挙げて“Pale Horse, Pale Rider”が黙示録の世界観を踏襲しているという論を展開している。また、ヒロイン Miranda の名は、*Tempest* のヒロインから着想を得ているという指摘がなされている。

参考文献

- Bollinger, Laurel. "Trauma, Influenza, and Revelation in Katherine Anne Porter's 'Pale Horse, Pale Rider.'" *Papers on Language and Literature* 49.4 (2013): 364.
- Cheatham, George. "Death and Repetition in Porter's Miranda Stories." *American Literature* 61. 4 (1989): 610-24.
- Ciuba, Gary M. "One Singer Left to Mourn: Death and Discourse in Porter's 'Pale Horse, Pale Rider.'" *South Atlantic Review* 61.1 (1996): 55-76.
- DeMouy, Jane Krause. *Katherine Anne Porter's Women: The Eye of Her Fiction*. U of Texas P. 1983.
- Porter, Katherine Anne. *The Collected Stories of Katherine Anne Porter*. Houghton Mifflin Harcourt, 1965.
- *Katherine Anne Porter: Conversations*. U P of Mississippi, 1987.
- Sullivan, Walter. "Katherine Anne Porter: the Glories and Errors of Her Ways." *The Southern Literary Journal* 3.1 (1970): 111-21.
- Unrue, Darlene Harbour. *Understanding Katherine Anne Porter*. U of South Carolina P, 1988.
- Youngblood, Sarah. "Structure and Imagery in Katherine Anne Porter's 'Pale Horse, Pale Rider,'" Unrue, Darlene Harbour, ed. *Critical Essays on Katherine Anne Porter*. Twayne Publishers, 1997.
- 本間喜美子「Katherine Anne Porter における愛」*仙台大学紀要* 6 (1974): 1-15.

**Coffee as the Future, Cigarette as the Present:
Exploring the Concept of Time in Katherine Anne Porter's "Pale Horse, Pale Rider"**

NISHIOKA Karen

Summary: Katherine Anne Porter's "Pale Horse, Pale Rider" (1939) was generally considered to be her autobiographical short novel. However, despite the many apparent similarities that Porter shares with Miranda, the novel's protagonist, the multitude of metonymies and metaphors in the novel implies otherwise. Drawing elements from the Old Testament, Porter describes Miranda's object of romantic interest called Adam as the prelapsarian Adam in the uncorrupted Eden. While the flow of time of Adam's world is slow and eternal, in Miranda's world, time is limited by a hectic modern life dominated by capitalism, war and the plague. In this paper, I intend to uncover the symbolic meanings of "coffee" and "cigarette" repeatedly enjoyed by the two main characters in terms of the flow of time.